

石巻会場

内容紹介



第 1-1 部 パネリストによる基調報告

奥田 知志 (公益財団法人共生地域創造財団代表理事)

【稲積】

皆さんこんにちは。それではシンポジウムに入りますが、東日本大震災からやがて2年半を迎えます。見た目には、少しずつ復興しているように見えますが、まだまだ本当の復興には程遠い感がいたします。真の復興とは何か。復興の主体は人間であります。その意味で、本日のシンポジウムの副題に「一人一人の心の復興を目指して」というテーマを掲げさせていただきました。

この度の震災は、戦後の日本人の価値観に根本的な転機をもたらしました。人権と申しますと、一口に言って、「人々が幸福を追求する権利」だと言われております。人間にとって本当の幸せとは何か。そのような問い掛けも今回の震災は私たちに突き付けました。戦後、日本では「無縁社会」という忌まわしい言葉が生まれましたが、震災後には「絆」という言葉が流行語大賞に選ばれました。別にケチを付けるわけではありませんが、流行語というのはいささか気になるところであります。この「絆」という言葉につきましても、人権という視点からもう一度問い直す必要があるのではないのでしょうか。

私は遠く離れた九州の福岡から参りましたが、九州の地からも様々な支援の手が差し伸べられました。一方では、がれき処理などを巡って、あるいは被災地から避難された方を巡っても様々な問題が生じました。正直申しまして、遠くの理解者であっても近くの拒絶者という一面も残念ながら見てまいりました。

本日は、現地で身を粉にして復興支援に取り組んでおられますパネリストの皆さんから、自らの体験を通して考えられた肉声をお聞きしたいと思います。それでは、まず奥田知志さんからお願いいたします。

【奥田】

皆さんこんにちは。先ほど紹介いただきました奥田知志と申します。私が暮らしておるのは九州・福岡県の北九州市であります。本職はキリスト教会の牧師をしておりまして、永くホームレスの人たちの支援をしておりました。震災が起きた時は、仙台にもホームレス支援団体が何団体かありますので、そこと連絡・連携を取りながら何かできることはないかということやってまいりました。そして、その中からホームレス支援全国ネットワークという組織と、生活クラブ生協と九州を中心に展開するグリーンコープ生協の2つの生活協同組合と連携をしまして、公益財団法人共生地域創造財団を立ち上げて、今、活動しております。今は仙台に事務所を置きまして、この石巻周辺、そして岩手県の大船渡、そして福島では、介護の初任者研修等の研修を開くなど、そういった働きをしております。

本日は時間が余りありませんので、その中の一つの取組、相互多重型支援のお話をさせていただきますと思います。震災があった時、九州におりますと、ともかく東北にもしくは東へ「元気を届けよう」といったフレーズが空港などに書かれていることが続いておりました。しかし、私の実感から言うとこの被災の地から何を聞くかということが九州に住む私たちの課題だったように思うのです。私はそういう意味ではいろいろな出会いの中で、たくさんものを教えていただきましたし、今、正にコーディネーターの稲積さんから定義がありましたように、人間にとって幸せとはなんなんだ、人が生きるってなんなんだということを、私は“東”から学んだように思います。ですから、これはある意味悔い改めでありました。キリスト教でいう悔い改めというのは、方向転換という意味があります。単に反省するというのではなくて方向を変える。“東”へではなくて、“東”からということです。私たちの



奥田知志さん

財団は、今も「From East (フロム イースト)」という掛け声をインターネットのアドレスに使っていたりしますが、この部分が非常に大きかったというのが一つの実感であります。

それでは、どのようなことをやってきたかという一つの例ですが、私自身が被災地に來ましたのは、2011（平成23）年3月の末でした。最初に入ったのは石巻でありました。ただ、私たちの財団の活動方針として、私が最初に活動理念としてあげたのは、「最も小さくされた方々に、偏った支援を小さく長く続ける」という、少し分かりづらい理念を掲げました。スタッフからは「偏った支援」と言っているのですかという質問が出たのですが、私は人間とは出会いたいと思うのです。ですから、その出会った人間に責任を持っていく。これはホームレス支援でもそうでしたが、ホームレスの人を支援しているってよく言われるのですが、世の中にはホームレスという人はいません。個別田中さんであったり山田さんであったり村上さんであったりするわけで、その出会ったその人とともに生きていくというだけの事でありますから、そういう意味では、被災者支援や被災地支援と言われますが、私にとっては出会ったその方との出会い。それはある意味偏った現実でありましたが、そこにとことん偏ってこういう考えがありました。ですから、大したことはできませんから一つの出会いを大事にしようと思いました。

それで、私たちが最初に行ったのは、牡鹿半島の小さな漁村集落の一つ、宮城県石巻市の蛤浜（はまぐりはま）と荻浜（おぎのはま）でした。私が到着する前に、既に当財団のスタッフが現地に入っておりましたので、九州からの支援物資はその集落に届いていました。もともと9軒しかなかった集落ではありましたが、そのうちの5軒が津波で流されている状態でした。私は、がれきの山となっている集落の中に入っていました。集落の一番奥には、避難所として使用している集会所がありまして、そこで亀山（秀雄）さんという区長の御夫妻が迎えてくださいました。私は、がれきがそのままになっていましたので、「ここにはボランティアの人や行政の方々は来られていませんか」って聞いたのです。すると亀山さんが、「いやここには誰も来ていません」とおっしゃった。本当に小さな集落だったので。私は、そのあと亀山さんから誰も来ないということに少し恨みめいたことを言われるかなと思っていましたら、亀山さんの第一声が「ここよりもっと大変な所がありますからー」とおっしゃってですね、私はこの出会いに胸がきゅんとしまして、ああもうこのおじさんと一緒に生きていこうと思ひまして、それ以来2年半ずっとこの亀山さんの家を訪ねている状態が続いています。本当にがれきの山になっていたその中で、亀山さんのつれ合いのあきこさんが、私に支援物資の中に入っていたと言って、九州から来た一つの絵手紙を見せてくれたのです。その絵手紙は巻物みたいな手紙で、墨で描いてあるのですが、あきこさんいわく、「私たちは今回の津波で全部失った、本当に船も何もかも失ってしまった。でもね…」とおっしゃりながら、その絵手紙の真ん中辺りを見せてくれました。そこには、「生きていればきっと笑える時が来る」って書いてありました。それを見せながら「全部失ったけれども、今日私たちこれで生きているんです」って涙流しながらおっしゃりました。私はその時に、人間が生きてって何かと本当に考えさせられたのです。私は、永くホームレス支援をさせていただきましたので、家がある、食べ物がある、仕事がある、これは当たり前なこと、それはどうしてもそれをするしなければならないというのはもう20数年やってきていますので、それが必要だというのは身に染みて分かっているのですが、あの極限の状況の中で、私は、今日これで生きているんだって言いきられたのが、その一通の手紙だったというのを聞いてですね、私は、支援の方向を定めることができました。何を今からしないとイケないのか、ということを非常に考えさせられた場面でした。

そこで支援が始まるのですが、当初は九州からいろいろなものを運び込んでいました。3か月ほど経った時、この写真は当時の浜の様子ですが、がれきの真ん中にあるプレハブはボランティアの人たちが寝泊まりできるように九州から運んできたものです。この写真は牡蠣の種付けをやっているところです。これは初年度の写真です。本当は春に行く作業なのですが、7月辺りの暑い中で作業をしていました。3か月ほど経った時、亀山さんの所をまた訪ねていくと「本当に支援は助かった。本当に有り難かった」とおっしゃってくださったのですが、その後、「でももう支援は断ろうと思う」っておっしゃりだしたのです。支援を始めて3か月、6月の頭頃でした。私がどうしたんですかって聞きますと、亀山さん

は「(自分は) ずっと漁師で、ある意味自分の力で生きてきた。ですけども3か月間、人からのもらい物で食べていると、それは有り難かったけど、つらかった。それと何のお返しもできないと思うと重い」とおっしゃったのです。支援が3か月経った時点でつらくて重いものになりだしていたようです。そして「もう支援は断ろうかなと思っているんだ」とおっしゃったのです。私、それにはすごく衝撃を受けました。これはホームレス支援でも同じなのですが、当時の“絆ブーム”もあって、やはりそうだった(重荷に感じていた)と思うのですが、どこかでゆとりのある人がかわいそうな人を助けているような非常に一方的な空気、憐れんでいるみたいな空気がまん延していたように思うのです。私もその(支援する側の)一員であったわけですが、いつも助けている人と助けられる人がいて、助けている人はいいことをやっていると思っているので元気がいいのです。気持ちがいいわけです。私どもが行っているホームレス支援の現場でも、お弁当を配っていると、助けている人はどうぞどうぞってやるのです。もらう人はいつもすみませんって謝っている。これが1年も2年も続いていくと、どんどん元気が無くなっていく。一体これは助けているのだから、元気を奪っているのだから分からないような支援活動がホームレス支援の現場にもあります。

私は亀山さんの言葉を聞いて全くそうだと思います、九州に戻りましていろいろと考え、そして持ち込んだのが「相互多重型支援」でした。具体的な活動としましては、財団で寄付を集めて、この蛤浜、萩浜の牡蠣(かき)養殖を復活させる取組なのですが、当時なかなか牡蠣の養殖のための部材もなかったもので、生活協同組合さんを通じて北海道や九州の牡蠣業者を通じてロープなどを全部そろえました。そして、とにかく牡蠣の養殖を復活させ、ある意味自分たちの力で(収入を得て)食べていけるような状態なるようにしました。ただ、これで終わるとやはり助けられればなしになってしまうので、一つだけ条件を付けました。条件と言いますと語弊がありますが、一つ検討してほしいことがありました。それは、牡蠣が出荷できる状態になったら、その牡蠣の一部を、私たちに買い取らせてくださいということです。私がずっと関わってきたホームレスになってしまった青年たちを雇い入れ、買い取った牡蠣を加熱用の牡蠣にして、箱詰めし全国に販売する。そのために牡蠣を育ててもらえませんか、今度は路上(ホームレス)の青年を助ける側に回ってもらえませんか、と提案しました。すると、その二つの村から、5人の漁師さんが、よし、分かったやろうと返事をしてくれましたので、復興の牡蠣のプロジェクトがスタートしたのです。

今年、初めての牡蠣販売を行いました。加熱用の牡蠣と言えども、やはりあたと少し怖いということで、最初は身内だけに売りました。今年は春から売り出して、約800箱完売しまして、5人の元路上(ホームレスだった)の青年たちが、萩浜にできた牡蠣のむき小屋に行き、来る日も来る日も牡蠣を洗っては出荷する作業を繰り返していました。

ですので、「相互多重型支援」というのはどのようなことを目指したかといいますと、漁師さんたちはある意味助けられながら自分たちの復興を目指し、復興を目指すと同時に路上(ホームレス)の困窮青年を助ける。困窮青年たちは自分たちが助けられて自立すると同時に、復興支援にも携わる。さらに、九州でその牡蠣を食べた私たちは一粒で二度おいしい牡蠣で被災地の復興支援と生活困窮者支援ができるのです。この牡蠣の名前は、「笑える牡蠣」にしました。「笑える牡蠣」って私が付けたときに、ふざけているのかと怒られたのですが、「生きていればきっと笑える時が来る」と書かれたあの手紙から、名前を付けました。今年の11月からは一般販売を始めますが、今シーズンは5,000箱が目標です。いよいよ今回携わる青年たちはそれで自立することになります。このように、絆というのは、やはり一方的に助けられるというのではなく、相互性が必要だと思うのです。助けると助けられるが相互に起こる。もしくは可逆性ですね。逆転できる。助けられていた人が、今度助ける側に変化できる。これが「絆」の中にはなくてはならないのではないかと考えてやりました。助けられたものは、同時に助けるものになれる、多重性。食べるほうは一つの牡蠣に多重の意味が込められている。

この牡蠣は、一粒で二度おいしいと始めたのですが、やっていくうちに、ある漁師さんから言われました。「奥田さん、これいくら復興復興と言っても、実は津波が来ていなくてもこの集落はあと10年後どうなっていたか分かりませんよ」と。それは、やはり後継者問題を抱えていたのです。それで

したら余計に、全く漁業なんて関わったこともない見たこともない町の青年たちをここに連れてくるから、100人に一人でも俺漁師やろうかなという人が出てきたら仕込んでもらえますか、と言いましたら、いいよという話になりました。今、一粒に三度目のおいしさが出るかどうかの挑戦という段階に入っています。先ほども言いましたように、漁師さんは自らの復興と困窮支援に携わる。困窮者の青年たちは自立とともに復興支援に携わる。消費者は自立支援と復興支援の両方ともに携われる。

私は、国の一番の役割は富の再分配だと思っているので、ある意味税制というのは非常に大事だと思っているのですが、私たちのプロジェクトはある意味消費による富の再分配です。牡蠣を買うことによって、その利益の一部が困窮者に回っていくというソーシャルビジネスモデルを作ろうということでやりました。お陰様で、牡蠣は穫れています。

残り時間ありませんので、同じような形で（宮城県）亶理町（わたりちょう）という所で行っている支援について簡単にお話します。亶理は「もういっこ」というイチゴで有名な所でありましたが、ここも津波に飲まれて、土地の塩分が高くなり、イチゴの栽培ができなくなってしまいました。今、国の復興交付金を使って「いちご団地」が作られましたが、私たちは、生活協同組合の生産者の話を聞いて、塩に強いトマトの露地栽培を行いました。これも、相互多重型でやっております。トマトの収穫にあたるのは路上の青年たちも含めた困窮者の人たちです。この写真は、津波で何も無くなった亶理の被災地ですね。次は、地中がれきを取っているところですね。それが去年の夏で、この土地がここまで変化したのです。この写真、写っているのは全部トマトなのです。一面トマト畑になりました。今年できたトマトを少し持ってきたのですが、もしよかったら受付に置いておきますので、是非お持ち帰りください。加工用ですから、見た目は不恰好ですけども結構おいしいです。ただ、今年は長雨が続き病気が発生してしまったので、去年の半分しか穫れませんでした。去年穫れた130トン、トマトジュースを1万本とケチャップピューレを作りまして生活協同組合ルートで販売しました。今年2年目に入ってすごく期待していたのですが、今年の長雨でさっぱりでした。今年は60トンくらいしか穫れないというところですね。現地のチーフをやっているこの写真の人は、私どもの財団のメンバーですが、彼も元路上生活者です。彼は今、若い人たちのリーダーになってトマトの収穫にあたっています。私からの発表は以上です。ありがとうございました。

友廣 裕一 (一般社団法人つむぎや代表理事)**【稲積】**

ありがとうございました。それでは友廣裕一さんをお願いいたします。

【友廣】

改めまして、一般社団法人つむぎやの友廣と申します。よろしく申し上げます。僕は今、石巻市の日和山（ひよりやま）に拠点をお借りしながら、先に御報告された奥田さんと同じ牡鹿半島で、浜のお母さんと一緒に小さな取組をいろいろとさせていただいております。インパクトの大きいどーンという立派な取組は何もできていないのですが、小さくても着実に続いていくような事業をしていきたいなと思いつつ活動をしておりまして、本日はそのお話をさせていただきます。

ざっくりと申し上げますと、現在2つの浜で3つの事業をやらせていただいております。牡鹿半島の雄鹿の角を使ったアクセサリーを「OCICA（おしか）」という名前のブランドで作っている事業と、漁師さんが使う網の補修糸でミサンガを作る事業、そして、その作った収益を貯めて、昨年（2012（平成24）年）の夏から「ぼっぼら食堂」というお母さんたちと一緒に運営しているお弁当屋さんの事業があります。

本日御来場された方は、石巻の方が多くとお聞きしているのですが、皆さん大体の位置は御存じだと思うのですが、牡鹿半島先っぽにある鮎川浜（あゆかわはま）という浜と真ん中位にある牧浜（まきのはま）という浜で行っています。

まず、鮎川浜のお話からさせていただきます。僕は2011（平成23）年3月17日に宮城県に生まれて、3月18日に石巻市内に入りましたが、当初は、避難所にいらっしゃる健常者ではない方の状況を把握するプロジェクトの地域マネージャーとして入りました。しばらく各避難所を回らせてもらったのですが、その際、たまたま御縁があって鮎川浜にお邪魔しました。すると、牡鹿漁協の方から「女性部のお母さんたちが何かやりたいと言っているの、ちょっと会ってこないか」という話をいただきました。そして、お母さんたちといろいろとお話をしました。やはり、皆さん船や漁具が流されてしまって、漁業の再開の目処が立たないと言っていました。そんな中、旦那さんはがれきの撤去作業などに行かれていたのですが、女性の皆さんは余りやる事がなかったようです。漁業がいつ再開するのか分からない状況の中で、自分たちが手を動かして、少しでもちょっとした仕事が作れないか、何か力になってくれないか、という話をいただきました。せっかくやるのでしたら、この地域の資源で何か使えるものがないかなといろいろと調査などを行っていたのですが、その中で、たまたまミサンガ作りを趣味としているお母さんがいました。（1993（平成5）年のJリーグ開幕をきっかけに流行した「ミサンガ」です。そのお母さんは、以前から手作りミサンガを近所の子どもたちに配っていて、「ミサンガおばさんと呼ばれている」とのこと。そして、津波に流されずに家に残っていた網を補修する糸で、1度ミサンガを作ってみようと思っていることを話してくれました。その話のあと、すぐに作ってくれたのですが、それがとても綺麗で、他の多くのお母さんたちも一緒に作っていくことになりました。ミサンガ作りは、結構難しいので、練習しながら作るの1か月くらい掛かるのですが、慣れてくると、皆さんはどんどん新しいミサンガを作っていました。新しい編み方をどんどん考案して行って、色合いが同じものはありませんでした。この事業は2011（平成23）年4月から始めて、6月には販売へと動き出しました。

当時はまだ、チャリティーグッズと呼ばれるようなものが余り世の中に出ていなかったもので、しばらくは売れるだろうなと思っていました。しかし一方では、ずっと売れ続けるものになるかは分から



友廣裕一さん

ないとも思っていました。このような話をお母さんたちとしながら、1本1,000円で販売することにしました。なぜこの価格なのかといいますと、このミサンガは、経費を差し引いた半分は作った人の給料にして、半分はみんなで貯めるためです。みんなで貯金して、いつか売れなくなった時や、ミサンガ作りは継続するけれども、他にやりたいことに出会った時に、少しでも自分たちの中で蓄えがあれば新しい事業を始めやすいのではないか、という考えから貯金ができる金額にしました。売り始めると、すぐに良い評判をいただいて、音楽イベントなどの大きなイベントでは、まとめ買いなどしていただき、たくさん買っていただきました。四国の音楽フェスでは、1日で300～400本売れました。そこにはお母さんたちは来られなかったのですが、高校生の娘さんなどに来てもらって一緒に販売しました。最初お母さんたちは、このミサンガが本当に売れるのかどうか疑心暗鬼な中で作っていたのですが、実際はみんな「超カワイイ」などと言いながら喜んで買っていってくれました。そのことを、販売を手伝ってくれた娘さんたちからお母さんに伝わると、お母さんたちはどんどんノってきて、思いを込めて作るようになりました。

すると、お母さんたちが作った団体の貯金通帳にも徐々にお金が貯まっていきまして、自分たちはこれで何かできるかもしれないと、結構前向きになってきまして、毎回話をしながらミサンガの次は何をしようかという話が出てくるようになりました。毎回出てくる話は、やはり漁師の奥さんたちなので、市場に出せない雑魚と呼ばれるような魚を、美味しく食べられるようにする料理の方法があるようでして、そういったメニューを中心とした飲食店をやってみたいというものでした。女性部のお母さんたちは、震災前から思っていたようで、そういう話もたまに出ていたみたいなのですが、震災前は震災前でやる機会がなかった。ですが、ミサンガの事業が始まると、お母さんたちが少しずつ結束して行って、お金も少しずつ貯まってきたので、この飲食店の事業をやってみたいという気持ちが強くなりました。2011（平成23）年の秋は1,000本ほどしか売れてなかったので、店舗を建てるほどのお金は無かったのですが、それを元手に、主にアメリカの団体からお金を提供していただけることになりまして、鮎川浜の被災したエリアに小屋を建て、2012（平成24）年の7月末に「ぼっぼら食堂」という飲食店をオープンしました。今、お弁当屋さんとして営業しています。

開業当初は、皆さん素人でお店も経営をしたこともない人たちでしたので、まずは様子見で週2日営業から始めました。しかし、オープンしてみると、もともとあった飲食店が流されてしまったことや、復興に関わる工事関係者の方などがたくさんいらっしゃることから、多くの方がお店に集まりました。「もっとお願いだから開けてくれ」といった声もたくさん聞きました。オープンの翌月には週6日営業になり、今でもてんやわんやでやっています。「ぼっぼら」という言葉は、石巻の方でしたら御存じかと思うのですが、浜の言葉で「急に」とか「突然」という意味です。これはすごく浜のお母さんたちの性格を表している言葉だなと思います。お母さんたちは、柔軟に臨機応変にどんどん仕事をこなしていくような人たちなのです。お弁当を見るとよく分かります。ぼっぼら食堂のお弁当は一つしかメニューがなく、通称ぼっぼら弁当と呼んで500円で販売しているのですが、弁当の中身は決まっていなのです。大体そう言うと日替わり弁当を想像されると思うのですが、日替わりよりももっと変わります。材料に雑魚を使ったりするので、例えば50個のお弁当の注文があった場合、イワシが30匹あったら30個はイワシの弁当だけれども、次はサバを使い、サバも足りなくなったら次はサケを使い、でもサケだと少し小さいから卵焼いて入れようか、といった感じでお母さんたちがどんどん自分たちで工夫し、調整しながら、その時にあるものを最大限活用して作っていくのです。もちろん最初はメニュー開発をしようといろいろとやっていたのですが、なかなかメニューが決まらず、これは私たちにはできないかもしれないと、お母さんたちはすごく弱気になってしまいまして、そこでまずは週2日営業で調整していきましようと言っていたのですが、気が付いたら取りあえずあるもので作っていく形が定番になってしまいました。お陰ですごく好評をいただいている、先ほども申し上げたのですが工事関係者を始め、地元の公務員の方々も結構いらっしゃる、ここ数か月は月2,500食以上の売り上げをキープできています。牡鹿半島の先っぽですので、当初は売れても1日40食くらいだろうなと正直思っていて、そうすれば取りあえず何とかお母さんたちの最低限の人員費くらいは払えるかなという算段で始

めたのですが、お陰様で大変順調にやっていて、お母さんたちの会社も立ち上がり、僕らはほとんど経営から退き、適宜サポートする程度で、基本的にはお母さんたちが中心となり、どんどん元気に営業している形でやっています。これが鮎川浜での事業の話です。

もう一つの話は、先ほど簡単に触れたOCICAというアクセサリーの話です。これは牡鹿半島の真ん中くらいにある牧浜という所でやっています。ここの牧浜は先ほどの奥田さんが支援を行っている蛤浜と同じように、牡蠣の養殖で栄えていた浜です。牡蠣は殻つきで流通させるよりもむいて流通させる方が多いので、女性の方たちは皆さん牡蠣むきをする仕事に携わっています。シーズンになると、浜のお母さんたちが加工場に集まり牡蠣むきをし、それが終わると「お茶っこ（お茶飲み会）」して帰るという習慣があったようです。しかし、震災で加工場も牡蠣も全て流されてしまって、養殖自体は徐々に始まってきてはいるのですが、小さい浜ということもあり加工場再開の目処がなかなか立たない。今年の秋によく加工場ができるようで、現在工事を行っているのですが、当初はいつ再開できるか分からないといった状況でした。この牧浜の集落は半分くらいの方は家が残り、半分くらいの方は、津波で家が流されました。少し高台のほうに仮設住宅ができたのですが、もともとあったコミュニティがばらばらになってしまいましたし、特にお年寄りの方については、仕事も無くなってしまって家族もいないため、家を出る理由が無くなってしまい、どんどん家に籠もり、家に一人であるというネガティブなことを考え塞ぎがちになってしまっている。そこに、ボランティアの人たちが来て、「お茶っこ」やりましょうと集会所でやってくれるのですが、毎日お茶っこをやっても、話すネタが無くなってくるし、続かないようで、何かみんなが集まって仕事をして、そのあとにお茶っこしてワイワイして帰る、そういう仕事を作れないかと話していたようです。

そんな時、僕は先ほどの鮎川浜の活動で動き出した後の2011（平成23）年9月ごろの話なのですが、地域の素材で何かできないかなと思い牡鹿半島を車で走っていると、「鹿飛び出し注意」みたいな看板をたくさん見掛けました。石巻の方はよく御存じだと思うのですが、牡鹿半島には鹿がたくさんいるのです。僕も鮎川浜まで車で走っていくと多い時だと20頭くらい見たりします。鹿の角は年に1回生え変わると知っていたので、この鹿の角を何かに使えないかなとずっと思っていました。すると、たまたま地元の猟友会の方とお会いすることがありまして、お話をさせていただきました。すると、牡鹿半島は現在、鹿がめっちゃめっちゃ増え、森が荒れて困っていること、その対策として県から依頼を受けて害獣駆除のようなことをやっていることを知りました。当然、駆除された鹿のほとんどはそのまま捨てられてしまっていて、角も特に活用されていませんでした。この鹿の角で、浜のお母さんたちの仕事を何か作れないかと思っていると、猟友会の方に話をしました。すると、そういうことなら俺が集めてきてやると言って、いろいろな猟師さんの所で眠っていた鹿の角を100本ほど集めてきてくれました。ただ、鹿の角って結構固くて、加工が難しく、僕ら素人が手を出すにはどうしたものかなと。そう思っていたところ、先ほどの鮎川浜という所がもともと捕鯨地で、鯨の歯を加工する技術を持っている方がいらっしゃいました。この方は、もともと捕鯨船に乗っていた方なのですが、現在キャンプ場の管理人をされておりまして、やはりキャンプ場内にも鹿の角が落ちていまして、それを加工して指輪や置物、キーホルダーなどを作られていました。切断面をピカピカに磨く技術を持っていらっしゃって、鹿の角とこの技術を活用した仕事を作れないかと思っているとお話しすると、そういうことなら俺が技術を教えてやると言っていました。

それから、素材を集め、牧浜のお母さんたちと一緒に、津波で流されなかった少し高台にある集会所に集まり作業をしました。最初は、先ほどの加工技術を持っている方に集会所に来ていただいて教えてもらいながら、ワークショップの形でシンプルなよくある角の形をしたホルダーなどを作りました。それらはボランティアの人にプレゼントしたり、孫にプレゼントしたり。また、作業後はみんなでお茶っこをしてとても楽しい時間を過ごしました。

ですが、僕らは今、3人で活動しているのですが、僕らもこの活動を続けていくには多少活動費を作っていくかないといけません。国からの助成金だけで活動すると、それが無くなると関われなくなってしまうので、これ自体を事業にできないかなと考えるようになりました。そして、デザイナーさんを紹

介していただいて、ああだこうだやりながらできたのが今の事業の形です。これは鹿の角を輪切りにして漁網の補修糸を巻いています。ドリームキャッチャーというデザインで、ネイティブアメリカンの方たちのお守りのデザインをモチーフにしています。悪い夢をネットで捕まえて、よい夢を運んでくれるという意味が込められています。この鹿の角を輪切りにして表面を磨き、真ん中に穴をあけ、白い輪っかを作る作業までは僕らがやってきました。今は知り合いの職人にやってもらっているのですが、危ない作業です。その後、お母さんたちに輪切りにした角をお渡しして、紙やすりを3種類使ってピカピカになるまで磨いてもらいます。そして、それを電動糸のこぎりでミリ単位の切り込みを入れていきます。難しい作業ですが、お母さんたちは2年もやっているので職人技の域になっています。この作業は、最初は若いお母さんたちがやっていたのですが、今は年配のお母さんたちもどんどん自主的に練習されています。週2回の本作業以外の時間に皆さん練習してくださっています。最後はこの切り込みに糸を掛けてでき上がりです。

終わるとお茶っこタイムです。皆さん漬物などいろいろと持ち寄ってきまして、ワイワイしています。海外からもお客さんが来てくれたりするのですが、来てくれた人には一緒にOCICAを作って帰ってもらい、その後はみんなでお茶っこをします。そうすると、あんだどこから来たの?といった話で盛り上がります。いつも新しい、いいエネルギーをいろいろな人が運んで来てくれるので、これまですごく健やかで楽しい雰囲気できています。

OCICAのネックレスは、定番は赤青花の3色、角の先端の細い所はピアスにして、これも3色販売しています。これは、手作りで作っているので時間も掛かりますし、安売りもできません。地元の人たちに見せると、こんな高く売れるの?とよく聞かれるのですが、ネックレスは2,800円でピアスは5,800円で販売させていただいております。そのうちの1,000円と2,200円がそれぞれ作り手のお母さんたちに入る仕組みになっています。お母さんの屋号のスタンプをパッケージの右下に押しているの、誰が何を作ったのかが分かるようになっています。そして、売ってくださった方には、何がどれだけ売れたのかを控えてもらっていて、入金があったらその分をお母さんたちに支払います。パッケージにもこだわりがありまして、地元の米袋を使って、1個1個ミシンで縫って作っています。今はお陰で国内外の40店舗以上で販売させていただいております。大々的に営業活動みたいなことはしたことはないのですが、いろいろな方が紹介してくれます。購入してくださった方の中には、ここで売べきだと行きつけのお店の人を口説いて営業までしてきてくれる方もいました。そのようなこともあり、どんどん縁を広げることができています。

今、12人のお母さんたちでやっています。2011（平成23）年の秋から平均して3万円くらいのお金を継続してお支払いすることができています。僕らは、事業規模を拡大するのではなくて、ここにいるお母さんたちのために事業を立ち上げているので、お母さんたちの笑顔が最大化できるような、最大化されるような事業にしていきたいなと思っています。ちなみに昨年（2012（平成24）年）、これまでの歩みを1冊の本にまとめて出版させていただきました。お手元の配布資料の中に小さいポストカードが入っていますので、よろしければそちらを御覧ください。自分が手を掛けて生み出したものを誰かに手渡す行為を通じてこそ、人は喜びを覚えたりするものだなというのを、こういう活動を通して感じていまして、それを実現するのがやっぱり仕事というものではないかと、意義なのではないかと思えます。仕事というと、雇用の話がすごく多くなってくるのですが、自分が生きていてよいとか、自分が必要とされているといった自分の役割としての、自分を確認するという意味での仕事ということがすごく求められているのではないかなと、今感じています。

近江 弘一 (株式会社石巻日日新聞社代表取締役社長)**【稲積】**

ありがとうございました。それでは石巻日日新聞社の近江弘一さんどうぞ。

【近江】

石巻日日新聞社の近江でございます。奥田さん、友廣さんともに非常にいいお話で、僕も牡鹿半島の方の出身ですので、感謝申し上げます。本日は、震災時の話も含めながら、我々の新聞社や僕がもう一つやっている会社の活動などを通した話をしていきたいと思っています。

まず、石巻日日新聞社は昨年（2012（平成24）年）10月に創刊100周年を迎えた地域紙です。もともと、現在の石巻市のエリアではなく、2005（平成17）年の市町村合併前の、石巻市の中心市街地を中心とした1市9町の中で新聞発行をしておりました。我々の理念というのは、いかに地域に情報を通して貢献していくかということだけです。

私がこの日日新聞社に参画したのは7年前の2006（平成18）年6月です。それ以前は、この石巻市の河南町の鹿又地区にありますマリレジャー用のウェットスーツを作る会社、株式会社モビーディックで働いていました。この会社は24歳の時に仲間と一緒に起業しまして、24年間営業担当の役員をしておりました。日本全国、海外を含めて営業活動をしている地元の人たちを雇用して、世界各地に商品を販売していました。先ほどの友廣さんのお話にもありましたように、OCICAがスペインでもアメリカでも売れているようですが、僕らの時代にもそのような気持ちがありました。その間、例えば1995（平成7）年の阪神・淡路大震災や、2001（平成13）年の9.11テロを経験しています。阪神・淡路大震災は、神戸の事務所で経験しておりますし、9.11では、たまたまその時はアメリカにはいませんでしたが、テキサスにある会社がテロの影響で営業不振に陥り閉鎖した事業経験を持っております。

その時代に何を感じたかといいますと、24歳からやってきた仕事というのは、基本的には広いマーケティングを行なって自分たちの製品を販売することで、自らの生きがいしようと思っていました。しかし、阪神・淡路大震災や9.11などを経験して、自分たちに全く関係のない事件が自分たちの人生に関わってくることをよく知りました。そして、以前から問題にはなっておりましたが、2005（平成17）年頃のシンクタンクの資料で、30年後の東北の沿岸地区は人口が半分、高齢者の割合が40%近くになり、行政崩壊を起こすと書かれているのを見まして、石巻地域の少子高齢化、人口流出の現状を改善するため、CSR部門として地元で何か事業を作れないかと、プロジェクトのリーダーとして（宮城県）女川町を拠点とするサッカークラブを作りました。全国から若い人たちを呼び込んで、町民になってもらい、町の産業である水産業で働いてもらいながらサッカークラブを運営し、多くの人が活動しに来てくれるような拠点を目指しました。グループ会社の中での一事業として立ち上げようとしたのですが、最終的には会社の中で利益を生まないということで、会社の事業としてはできなくなりました。

しかし、自分の生き様として、どうしても地域に貢献していく必要がある。大学卒業後すぐに入った会社は、サラリーを得るために入り、次に起業したウェットスーツの会社は自分の好きなことで何とか人生を楽しくしていきたい、生きていきたいということで作りましたが、私が48歳のときに親父が亡くなって、親父の写真を片付けているときに、48歳って人生のどの辺になるのかなと思ひまして、そうすると時間が足りないと思うようになりましたし、もったいないと思ひました。死を意識して生きていこうと、それまでの人生の自分で培ってきた事業を全部捨てて、まず女川町でスポーツを通して地域に貢献する、地域を活性化させる事業を始めました。

そうこうしていると、石巻日日新聞さんから、会社を立て直してほしい、6年後の創刊100周年を迎

**近江弘一さん**

えるために、力を貸してほしいとの依頼があり、企業再建のために石巻日日新聞に経営陣として入社しました。きっかけは先ほど申し上げた通り、徹底した地域貢献をしたいという思いがありまして、当時94年間も続いている地域紙の中に、何か継続する肝があるはずだと、何か必ずコアなものがあるはずだと思い、それを見付け出せば情報を通した地域貢献ができるのではないかと思い、参画を決めました。実際、石巻日日新聞は、非常に会社としては危ない状況にあったのは確かでした。多くの業務改革、業務の効率化、コストカットなどいろいろなことをしましたが、会社を立て直すのにやはり一番大事だったのは、地域に貢献する個々の能動的な活動を支えようということでした。2006（平成18）年までしばらく赤字体質だったのですが、2007（平成19）年から黒字体質に変わり、2009（平成21）年の暮れには念願の紙面カラー化のための輪転機を導入することができました。これは、本当に地域に貢献していく新たなステップとなりました。

まず、2011（平成23）年2月に地域の行政報道や市報等を新聞社の人員・設備などの能力を使って行えば、公務員のコストダウンにつながり、これも地域貢献の一つだろうということで、東松島市の入札に提案参加して受託しました。そして、2011（平成23）年4月からその事業が始まるという矢先に、3月11日の震災を迎えました。生命の危機が全ての人に迫ってくるくらいの震災でした。私たちには、人権という権利と、責任と義務、それから使命というものがありました。それは、どのような状況下であっても地域の人々に情報をしっかりと伝える使命です。

震災直後、多くの人が震災で何も分からない中で、やはり知る権利が多く奪われている状況でした。私たちは、まず命を助けるところから始め、そして、情報を伝える本来の事業を行うことにしました。ただ、非常に狭い地域が、それぞれ閉ざされていましたので、活動する内容もそれから質も量も範囲も全て制限を受けました。私どもの会社の立地している場所は、石巻市の双葉町という所です。大きな被害を受けた南浜（みなみはま）や門脇（かどのわき）のすぐ隣です。私どもの会社は1階のフロアが浸水する程度で収まりましたが、これは海との間に日本製紙さんの大きな工場がありまして、本流のがれきが全てそこで止まったお陰で、私どものブロックだけが助かりました。社員の一人は、一昼夜流されて、何とかヘリコプターに命を救ってもらったという状況でしたが、特に報道の記者たちは、各々が各々の判断で、地域に貢献できる事業をしようと、活動しようと動いていました。2006（平成18）年から、古い新聞社の体質の形骸化された地域貢献という言葉を磨き直していたお陰で、それぞれが頑張ってくれたのだと思っています。

そしてもう一つ、先ほどお話しましたサッカークラブ・コバルト・レ女川についてもお話します。震災当時、この選手たちは女川の水産加工場で働いていました。彼らの中に、地元の人はいなかったのですが、地域の住民として活動しているので、3月12日から初期の救難活動に入りました。それは、やはり地元貢献をするためにその町に来て働かせてもらって、好きなサッカーをして、地域に溶け込んでいくという目的、理念がはっきりしていたからだと思います。

今、私どもは子どもたちに目を向けて、3か月に1回のペースで発行する石巻日日子ども新聞の製作を手伝っています。やはり子どもたちにも主張する場が必要だと思いますし、子どもたちにもこの地域を考える権利があると思いますので、多くの子どもたちがこの地域で参画できるような体制を整わせていきたいなと思っています。

人権という言葉を聞くと、非常に堅苦しいといえますか、とても重いものであるとの印象を受けます。私自身、浜から10メートルくらいの所で生まれ育っていますので、実家はもう完全にやられてしまいました。そこで、おふくろさんが一人暮らししていたのですが、幸い近所の方に助けていただいて、ついこの間まで仮設住宅に一人で住んでいました。しかし、特に老人だけの単独世帯、それからそういう独居の老人というのは、近所とのつながりがしっかりしているため、いつもいろんな情報が入ってくるのです。しかし、それらを有効活用するための体力とか意欲とかを継続することが非常に難しいのです。ですから、一人一人の復興を、人権で何とか守ろうという守ってあげようということについては、非常に難しい問題がいろいろあるのではないのかなと個人的にも思っています。現在、おふくろさんは高齢者向けのサービスがついた部屋を賃貸で借り、三度の食事を出していただいております。

すが、多分もっともっと大変な人が一杯いて、自分の周りでも、同じようなことが起きているということを見ると、我々の新聞社は、多くの情報を新聞という形でなくても、何らかの形で発信していかないかと今みんなで話し合っています。

これからも、皆さんと一緒に地域のために生きていこうと決めていますので、今後ともよろしくお願いたします。ありがとうございました。

鈴木 るり子 (岩手看護短期大学専攻科地域看護学専攻教授)

【稲積】

ありがとうございました。最後に鈴木るり子さん、お願いいたします。

【鈴木】

最後になりましたが、岩手看護短期大学で保健師の教育をしております鈴木と申します。私が保健師として28年間勤務していた岩手県大槌町が津波により壊滅的な被害を受けたことは、会場の皆さまも御存じだと思います。そこに、全国から延べ555人の保健師が入り、全戸を対象とした調査を実施しました。本日は、その調査結果についてと、今大槌町はどのような状態になっているかを、岩手県を中心に被災者支援を行っている立場からお話させていただきたいと思っています。

まず、津波による健康問題とは、どのようなものがあるのでしょうか。一つは津波に飲まれ海水が肺に入ることによって起きる津波肺炎でした。そして、多くの方が低体温症で亡くなっています。震災が発生したあの日、雪が降っていました。海水温が5℃の場合、30分で意識不明になり、90分で亡くなります。せっかく救助され、避難所に運ばれてきた方も、電気も通じていない状況下で、低体温のために亡くなってしまうことが多かったのです。私たちは災害看護などでトリアージ¹を行います。今回の震災では、黒タグ（カテゴリー0：死亡群）で助けることができない方が多く運ばれてきました。

このような大災害が起きたときに私たちが使うのは、危機の結果に影響する3要素です。災害時、非常にスピード感のある対応をしていかないといけない。そして、それをやったことの効果判定をし、効果があったかなかったかと評価しなければならない。今回の震災で多く言われたのが、平時の準備でした。岩手県の場合、沿岸部を走っている国道45号線の所に、“ここまで津波が来ますよ”という明示がされています。ところが、多くの人々がここまで来るはずがないと考え、高台などへ逃げなかったために、たくさんの尊い命を失う結果となりました。今日、石巻の海岸を少し走ってみたのですが、岩手県とは違うなと思いました。国道に先ほどの“ここまで津波が…”という標識が無かったのです。平時の準備がいかに大事かが、このことから分かります。

千年に一度の津波でしたから、想定外の事が多々あったと報道されておりますが、今、私たちが今回の震災から学ぶものは、自助です。自分たちでできることは、やっていかなければいけないことと、それから後世に対して伝えていかなければいけないこと。もちろん私は看護職として教育を通しながらやっておりますが、この平時の準備が非常に大事です。

それから、初動の対応能力です。先ほどもお話がありましたが、十分な情報が入ってこない中で、適切に判断をし、実行をしていかなければいけない。そして、防災と減災をしていかなければいけない。

また、今、被災地で一番問題になっているのは、復興住宅をどこに建てるかということなのです。大槌町には我が家がありましたが、津波で失っております。親戚は7人亡くなっているのですが、人口15,000人の町で1,400人が亡くなっています。我が家は山を崩して建てる予定だったのですが、地権者の問題で建てられるようになるのは2016（平成28）年です。あと3年後です。

それから、岩手の沿岸部はもともと経済的に非常に貧しい所でした。そこが壊滅しました。今日、私は岩手から石巻まで車で来て、港などを見てきました。話では、復興が全く進んでないと聞いてい



鈴木るり子さん

1 識別救急：災害時などに負傷者等の患者が同時多発的に多数発生した場合に医療体制・設備等を考慮しつつ傷病者の重症度や緊急度によって分別し、治療や搬送先の優先順位を決定すること。日本では、カテゴリー0(死亡群：黒タグ)、カテゴリーⅠ(最優先治療群：赤タグ)、カテゴリーⅡ(待機的治療群：黄タグ)、カテゴリーⅢ(保留群：緑タグ)の4つのタグに分類される。

ましたが、石巻では、復興関係の車やトラックが行きかい、そして工場からは煙が出ています。そのような光景は、岩手県の沿岸部ではほとんど見られません。そういった地域差を今日は随分と感じてきました。

この写真は、私が28年勤務した役場です。皆さん御存じだと思いますが、この写真は私が住んでいた大槌町の赤浜という所で、釜石の観光船が打ち上げられた所です。この民宿の隣が私の姉の家でした。多くの御遺体が流されたのではないかなと思っています。家が流された所、全壊になった所、また半壊、浸水、被害の無い所でも、大槌町全体が被災者であるということで、私たちはローラー作戦を実施しました。現在、11,000人しか大槌町にはいません。ただ私たちは、震災から1か月半後に全ての住宅を回って歩き、全体の86%の住民の安否確認をしました。町は壊滅、役場も無くなっていましたので、安否確認の調査依頼を受けた形で実施しました。避難所が何か所できたのか、そこに何人逃げたのか、震災直後には把握できない、そのくらい混沌としておりました。

避難所に身を寄せた方でしたら分かると思いますが、当時避難所は不足しておりました。町の人口の半分もの人々が避難しなければならない事態を行政は想定していなかったためです。もちろん、水や食料は不足していたのですが、トイレやペットの問題も多々ありました。また、非常に寒うございましたので、そのような中でノロウイルスやインフルエンザが発生したらどうしようという状況でした。今日はスライドの関係で現場の写真を全部抜いていますが、御遺体をきちんと安置することができない状況のなか、霊安室の必要性を感じた大規模災害でもありました。

今は、どこの自治体でも地域防災計画を作ることになっていますので、皆さんがお住まいになっている所にも防災計画があると思います。皆さんが災害に遭った時、誰が助けに来るのでしょうか。通常は隣近所の人々だと思います。皆さんは隣近所の方たちとはどのようにつながっておりますでしょうか。今回は震災前の近所付き合いも様々なところに影響を与えました。障がいのある方が直面する問題もたくさんあります。情報の問題もあります。災害発生時には情報はなかなか入ってきませんし、入ってきたとしても不正確な情報だったりします。このような状況の中で、私たち全国から集まった、延べ555人の保健師が調査を行いました。大槌町は近くに新幹線は通っていません。岩手県内唯一のいわて花巻空港は、震災発生後しばらくの間、民間航空便は利用できませんでした。遠方からいらっしゃる方は、石巻でも遠いなと思うかもしれませんが、岩手県は四国4県に匹敵するくらいの面積があります。もし、遠方から大槌町に来る場合は、当時新幹線も止まっていて使えませんでしたので、秋田空港を使い、新幹線で盛岡まで出、そこから車で120km走る必要があります。そのようなところに555人の保健師が全国から集まりました。保健師の被災地活動は、被災地の家庭訪問で住民の方々の血圧を計って帰ってくる、単にそういうことを行うだけではなく、この方々にどういうことが必要なかを把握し、復興計画についての提言書を作るのです。

私たちは、この町にどのような人がいらっしゃるのか、調査して人口ピラミッドを作成しました。その結果、様々な問題が見えてきました。まず、住民の方々の血圧が高いことが分かりました。私たちは、早急にその血圧を下げるための10年計画を住民の方々と作りました。20歳代から40歳代までの幅広い年齢層の多くの人たちが、血圧が高かったのです。今、被災地では心不全で亡くなる方が多いです。それは三大死因（がん、心臓疾患、脳卒中）の一つだからでしょう、とあっては困ります。岩手県の沿岸部にあった3つの県立病院は津波で破壊されました。特に、大槌町は全ての医療機関が津波で無くなりました。ですから、大槌町には入院ベッドが無いのです。心不全になった場合、隣の町まで救急車で運ばなければならない、そのため途中で亡くなってしまう場合もあるのです。医療状況というのは単に医者がいるかいないかだけの問題ではないです。看護師も看護職も含めて、人材をどう確保するかという問題、そして施設・設備の問題でもあるのです。これらの問題を含め、住民と一緒にどのようにして解決していくか考え、まず10年掛けて血圧を低くするための活動を展開していこうと考えております。それから被災地には、「DMAT」（ディーマット：災害派遣医療チーム）や「JMAT」（ジェイマット：日本医師会災害医療チーム）といった医師のグループも入ってきたのですが、やはり保健師の派遣チーム「DPHNT」（ディーフント：DisasterPublicHealthNursingTeam）が必要

だなど私は考えています。それは、2年3年と掛けて町の復興に関わる、長期間に渡って住民の健康を守るための計画に関わる、そういう職種が行政に必要だと思っております。

現在、関わっているのが、被災者検診（厚生労働科学研究費補助金10年間の岩手県における東日本大震災の支援を目的とした大規模コホート研究）です。2011（平成23）年からやっておりますので今年で3年目です。千年に一度の津波を体験した人たちがどういう状態にあるのか検診して調査しています。実は、被災地において心の問題を抱えている人の数は、全国平均と比較して約2倍という結果が出ています。これは震災直後から現在まで改善していないのです。それは、職業との問題にも関わっております。

ここで今日皆さんにお話ししたいと思っているのは、ソーシャル・キャピタル（人々の間の信頼関係や人間関係（社会的ネットワーク）、つながり）です。今回の大震災以降、“絆”という言葉がたくさん出てきたりしていますが、このソーシャル・キャピタルというのは私たちが暮らしていくために必要不可欠なことです。お手元の資料にもございますので見ていただければいいと思うのですが、ロバート・パットナム（アメリカの政治学者。ハーバード大学ケネディスクール教授）という人が提唱した概念です。これは、地域でのネットワーク、周囲への信頼感、そして互酬性（ごしゅうせい：ものの相互のやりとり、あるいはそれに基づく制度のこと）に着目しており、今回は約2,000人を対象とした調査結果を分析しました。その結果、このソーシャル・キャピタルは、避難所の転居回数と関係があることが分かりました。大規模災害発生直後というのは、身を寄せた避難所が1か所だけではない場合があります。多い人では、避難所を10か所も変えていました。そういう人たちは、ソーシャル・キャピタルが低くなり、夜眠れないといった症状などが出ています。ですので、避難所の転居回数は多くしてはいけないのです。多くの方が避難できる場所を作っておかなければいけないのです。

何を言いたいかといいますと、今後、私たちが目指していく地域づくりの重要なポイントは、ソーシャル・キャピタルを向上させる観点が不可欠であるということです。まず、第一は健康づくり。そして終の棲家、死に場所を確保するということが必要なのです。え?と思われるかもしれませんが、私たちは家を流され、住む場所が定まっていな中でどうやってこれからの暮らしを支えていけばいいのでしょうか。単なる家ではないのです。死に場所として保障されている安心できる場所が必要なのです。

大槌町の復興の兆しは、今も見えていません。音が聞こえてこない。そのような大槌町の現状を見続けている私は、今日石巻の港に来てびっくりしました。石巻のような音がしたり、車が走っていたりすれば、大槌町の人たちももう少し勇気をもらえるのではないかなと思いました。しかし現実には、それが聞こえない中で、大槌町の人たちが何を支えにして生きていけばよいのだろうか。私たちができることは、安心を作り出すことなのではないか、と思います。

では、どうやって作っていくのかといいますと、スタミナが必要です。あのような過酷な体験をして、頑張り続けると心が折れることもあると思います。ですが、一人でなくて誰かつるむ人がいれば、スタミナが強まるのかもしれない。私は、被災者の一人としてずっとこれからも地域づくりをしようと思っています。できれば本日御来場された皆さん方は地元の方ですし、被災者の方もいらっしゃるかもしれませんが、被災地がどうなっているのか、復興は進んでいるのか、お互いに声を掛け合っていたら、地域づくりをしていただきたい。

大震災から1年半が経過し、復興の先行きが見えない状態が続く中、被災地ではこれから自殺が増えていきます。これは阪神・淡路大震災後の研究などでも言われています。一見、復興が進んでいるように見えるかもしれませんが、既に存在する様々な問題、そして新たな問題も出てくるでしょう。

これからが私たちの正念場です。「自殺をしてはいけない」ということをはっきり口にして周囲の人々に伝えていただきたい。そういうことを言うてはいけないというのではなくて声に出して話をしてもらいたいと思います。

以上で終わります。

【稲積】

パネリストの皆さん、お一人お一人から自らの体験に基づく大変具体的なお話を頂戴いたしました。ここでコーディネーターである私から何か中間的なまとめをする必要もないと思います。皆さんの一声一声が聴衆の皆さんのお心にも響いたと思います。

今から休憩に入りますが、どうかこの休憩時間の間にフロアの皆さんからは是非質問を出していただきたいと思います。第2部のパネルディスカッションをより活発なものにし、より響き合うものにするために、壇上におります私たちパネリストだけではなくて、会場に御来場の皆さんと御一緒に考える時間を持ちたいと思いますので、是非質問を出していただきますよう、御協力をお願いいたします。それではこれで第1部を閉じたいと思います。

*このシンポジウムの「基調報告」の様子は、動画共有サイトYouTubeの「人権チャンネル」にて視聴可能です。

<https://www.youtube.com/jinkenchannel>